

濱田耕策編著

『古代東アジアの知識人』

——崔致遠の人と作品——

(九州大学韓国研究センター叢書 2)

九州大学出版会 二〇一三・一二刊

A5 二八八頁 四八〇〇円

崔致遠は、新羅末期、渡唐して科挙に及第、節度使の高駢に仕え、その幕下で多くの文章を物した。新羅帰国後、時務十余条などで政治改革を提案したが、受け入れられず、後に隠棲したという朝鮮古代の著名な文人である。彼の文章は自らの詩文集『桂苑筆耕集』、高僧の徳を称えた『四山碑銘』などに残り、現代でも後孫を称する家門が続く。

さて本書は、濱田耕策氏を代表とした二つの研究プロジェクトの成果を基にして、九州大学韓国研究センター叢書として刊行された。三編九章からなり、付録として『三国史記』崔致遠伝などの書下しと現代語訳が収められている。以下では各章の内容を概観する。

【歴史編】 濱田耕策「新羅の文人官僚崔致遠の『生』と『思想』」は、崔致遠伝と『四山碑銘』、『桂苑筆耕集』などの断片的な記事を基に彼の事績を再構成する。また、崔致遠の慕華主義を「郷」の用法に基づいて理解する見解は興味深い。静永健「新羅文人崔致遠と唐末節度使高駢の前半生」は、『桂苑筆耕集』に収録

された「記徳詩三十首」という高駢を称揚した詩を考察し、高駢の事績のうち、正史に欠けた記録を補っている。張日圭「崔致遠の儒教的政治理念と社会改革案」は、『桂苑筆耕集』や『四山碑銘』などを分析して、伝存しない時務十余条で提出した崔致遠の社会改革案の思想を復元する。川本芳昭「崔致遠と阿倍仲麻呂」古代朝鮮・日本における「中国化」との関連から見た」は、崔致遠と阿倍仲麻呂の自意識と後世の評価を通じて、朝鮮と日本の中華意識がどのように展開したのかを論じる。

【文学編】 竹村則行「新羅・崔致遠と晩唐・顧雲の交遊について」は、崔致遠が高駢幕下で著した「檄黄巢書」を当時の文体の類型と比較して評価し、また晩唐の詩人の羅隱や顧雲との親密な交流実態を示す。静永健「千載佳句」所収崔致遠逸詩句初探」は、平安時代中期の漢詩集『千載佳句』に収録された崔致遠の詩の断句を解説し、その性格を推定している。西山猛「崔致遠『桂苑筆耕集』における唐代に現れた詩語について」は、『桂苑筆耕集』中の唐代独特な詩の用語を列挙し、崔致遠の語彙レベルが唐本国の詩人のそれと全く遜色がなかったことを明らかにしている。

【書誌編】 柴田篤「『経学隊仗』の成立と崔致遠」は、崔致遠の著作とされる『経学隊仗』の刊行と流布の過程を究明し、祖先顕彰事業で後孫が彼に仮託した書物であると述べる。六反田豊「『西岳志』異本考―その概要と類型化―」は、新羅「三賢」(金庾信・薛聡・崔致遠)を祀る西岳書院の沿革を記録した『西岳志』の数多く存在する異本を、体裁と構成を調査して、十種類七類型に分類している。

本書は日本で初めての崔致遠に関する専著であり、ここに刊行の第一の意義がある。今後、中国史上でも認められた稀有な新羅文人崔致遠の研究の深化を期待したい。

(植田喜兵成智)